

1 調査研究の流れ

道徳科の授業

主題名 仲間を信じて
「B 相互理解、寛容」


教材名 まかせてみようよ

導入 「ぼくは、どんな思いから石井さんにまかせてみようよ」と言ったのか考える。

展開

終末 意見や考え方がちがう友達とひとめ合うために必要なことを考える。

振り返り 授業で考えたことや、これから気をつけたことなどを考える。



担任の願い

授業では具体的な場面が想定されず、やや抽象的な振り返りが多かった。
→自然の家での実際の活動を通して体験することが必要ではないか。

PA プロジェクトアドベンチャー〈ビート〉〈キャッチ〉〈人間知恵の輪・タイムアタック〉



〈インパルス・タイムアタック〉

児童の声

「友達が自分の出したアイデアに対して、いいね、それ、と言ってくれたのが嬉しかった」
「チームワークが大切だと思った。みんなで考えた作戦がよかった」
「みんなで協力してできたこと、失敗した友達を責めずに最後まで挑戦できたのがよかった」
「絶対に達成できるという気持ちをもつことが大切だと思った」

授業 2学期に再度「相互理解、寛容」の内容項目で「約束」という題材の授業を行った。

2 成果

- 道徳の内容項目に関する活動を、担任が自然の家PA担当者と相談し、意図的に取り入れることができた。道徳で考えたことを実際に経験することで、体験的な理解につながる。
- 学級全体で一緒に活動に取り組むことで、価値を共有できた。
- 道徳で考えたことを実生活の場面で生かすこと、実生活の道徳的価値に関わる様々な問題について道徳の授業の中で考えていくことの両方が大切であるということを改めて実感した。
- 学級の変容として、相手のミスを指摘したり、異なる考えが出たりしても、トラブルにならずに話し合うことでよりよい方法を出せるようになった。また、学習発表会などの共通の経験を経たことで、さらに学級としてまとまりがでてきた。

3 課題

- アンケート結果では、寛容の項目にそれほど向上が見られなかった。道徳的な意識を数値で見ることがどこまで正確なのかを考える必要がある。
- 道徳性の変容は長期的にみていくものである。道徳の授業直後やPA直後のアンケートだけで判断することは難しい。

体験活動等を通じた道徳教育推進事業に係る
協力校の取組について



北秋田市立米内沢小学校



由利本荘市立岩城小学校



湯沢市立山田小学校

秋田県教育庁生涯学習課では、文部科学省委託事業として「PAを活用した道徳教育推進に関する調査研究事業」を平成29年度から展開しております。

自然の家での宿泊体験学習等を行うプロジェクトアドベンチャーの活動を、道徳科の授業の導入等で児童に共通体験として想起させるなど、体験活動との関連を図った道徳科の授業を、各管内1校ずつの協力校に実践いただきました。本事例集では、協力校である3小学校の実践を紹介します。

北秋田市立
米内沢小学校
5年生 26名
(男子12名・女子14名)

1 調査研究の流れ
PA プロジェクトアドベンチャー〈ビートの〉〈せーの〉〈大縄抜け〉
PAからの課題
・特定の友達とのみ関わりをもとうとしていた。
・話合いの時間を設け、お互いの考えを理解しようとしなかった。

道徳科の授業

主題名 わかり合うために
「B」相互理解、寛容
教材名 ブランコ乗りとピエロ

導入
PA体験の映像をみて、くこの関わり合
いでうまくいかなかったことを想起する。

展開
P Aの写真を再度提示し、経験を
振り返る。

終末
価値の自覚につながるように、P
Aの写真を再度提示し、経験を
振り返る。


振り返り
「今までの自分」から「これからの自分」
を考える。



学習発表会に向けての活動の中でも、児童は、「相互理解、寛容」の内容項目を意識できた。

児童の声

発表会前の練習では歌にするかダンスにするか迷っていて、ぼくはダンスがよかったけど、他の人の意見を聞いて歌を歌うことにしました。いつもは自分の意見を強く言いすぎるけど、発表会を成功させるためにみんなの意見を聞いて考えを一つにまとめたことで発表会が成功しました。



2 成果

- 共通の実体験をしたことで、価値を自分のものとして捉えることができた。
- 様々な活動の中でPA体験の場面を問いかけることによって、少し行動を変えようとする態度が見られるようになった。
- 普段は遠慮して意見を伝えることが少ない女子が、自分の意見を伝える場面が見られるようになった。
- アンケート結果から交友関係の広がりが見られた。特に「多くの人に好かれている」「自分のことが大好きである」といった自己肯定感の高まりが顕著であった。体験活動を道徳科の授業で補充する実践が効果的であった。

3 課題

- PA体験を行うに当たり、アクティビティが児童の実態に合った活動なのか、自然の家職員との綿密な打合せと確認が必要である。
- 体験活動を道徳の指導計画や授業にどのように位置付けるか。
 - ・体験活動における児童の実態から道徳的価値につなげるため、指導計画にどう位置付けるか。
 - ・体験活動を授業のどの場面で生かすか。

由利本荘市立
岩城小学校
5年生 35名
(男子18名・女子17名)

1 調査研究の流れ

道徳科の授業

主題名 せいじつな生き方とは
「A」正直、誠実
教材名 手品師

導入
「誠実とはどんなことなのか、アンケート結果を基にペアで情報交換する。」

展開
「誠実に生きる」とはどんなことかについて、考えたことを書く。

終末
振り返り
「誠実に生きる」とはどんなことかについて、考えたことを書く。




担任の願い 誠実な明るい心で自分の気持ちと向き合える子どもにしたい。

「うまくできたかどうか」という結果より、「みんなで正直に頑張ることができたか」ということを大事にするアクティビティに。

PA プロジェクトアドベンチャー〈ヘリウムフープ〉〈みんな乗っかれ〉

ヘリウムフープ
指を離さずに、フラフープを持ち上げ

みんな乗っかれ
1枚の板の上にグループ全員が乗る




2 成果

- 国立青少年教育振興機構が開発した「生きる力の測定・分析ツール」のアンケート結果から、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の項目の中で、特に、「自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる」「人の心の痛みがわかる」といった、「誠実」の内容項目に係る項目が向上していた。
- 道徳科の授業で扱った内容項目、担任の願いを共有、反映する形で、自然の家職員がアクティビティのプログラムを組んだことの意義は大きい。

3 課題

- PAがたとえ短期間であっても、確実に教育的な効果があるということは、経験的には明らかである。しかし、短期間では統計的有意差があらわれるまでには至らない。長期であればあるほど、客観的な効果があらわれるのではないか。
- 教科教育で効果を上げるには、PAの基本的な手法を用いて、みんなが安心していられる環境をつくり、「刺激」「意味」「サポート」を念頭においた教材や手法を開発すればよいのではないか。
- 教師がスキルを磨いて、体験活動や授業に係るコーディネート力を付けていく必要がある。